女医とナースと僕

童貞蜜液検査

高村マルス
挿絵／旅人和弘

立ち読み版

KTC
KEEL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　痴女医の生棒検査……4
第二章　前立腺濁液淫射……43
第三章　女子医学生の教材に……79
第四章　痴女たちの逆レイプ……119
第五章　初体験アナルオルガ……152
第六章　検診室で痴女たちと乱交！……204

登場人物 *Characters*

生田 貢
（いくた みつぐ）

華奢で色白でととのった顔立ちの美少年。名門の私立顕能（けんのう）学園二年生。やや気弱な性格で、校内検診の結果、仁慈医科大学付属病院で検査を受けることになる。

藁科 志摩子
（わらしな しまこ）

仁慈医科大学付属病院に勤務する泌尿器科の女医。面長、彫りの深い顔立ちの知的な美女で性にも奔放。

野川 沙貴
（のがわ さき）

同病院のナースで、志摩子の貢への検診を補佐する。きつめの眼差しで黒縁の小さな眼鏡をかけている。

根本 優子
（ねもと ゆうこ）

仁慈医科大学の女子医学生。巨乳で華やかな顔つきをしており、積極的な性格。

佐々木 万里
（ささき まり）

同じく仁慈医科大学の女子医学生。優子に比べると無口で物静かな少女。

沙貴は貢の勃起を見て、ようやくその手を股間から解放した。
「まあ、元気いっぱいになっちゃって。いけない子ねえ」
志摩子が赤い亀頭を指先で一回弾いた。すると肉棒がグッと上を向く反応を見せた。
「先生たちがそんな格好で……ああ、沙貴さんの、アソコに手が……だ、だから……」
貢はペニスの勃起状態をどうすることもできず、女医とナースの挑発行為のせいだと訴えようとした。しかも沙貴に求められた通り名前まで口にして。
志摩子は貢を鼻で笑って、沙貴と眼を合わせ、「検診室に」と言って頷いた。
「今日は前立腺炎の検査をします。検診室に移って、前回言っておいたように、お尻の穴から指を入れて、前立腺マッサージでたっぷり射精させます」
「あっ、い、いやぁ」
精液採取は前回志摩子に予告されていた。貢は恐れていた射精という言葉をズバリ言われて、心に大きな動揺をきたした。具体的に恥ずかしい言い方で宣告されて、思わず情けないイヤイヤをするような声を上げてしまう。
検診室は他の患者からそこへ行くところを見られないように診察室とつながっている。志摩子は前立腺マッサージの準備のため検診室に入った。貢は診察室にナースの沙貴と二人だけになった。

「坊や、あなたはさっき、『アソコ』なんてエッチなこと言ってたわね。アソコってどこのこと？」
沙貴が眼鏡レンズの向こうから細めた眼で貢を見据えながら、診察台の横に立った。貢は両手で前を隠している。沙貴はその手を「ほらほら」と言ってのけさせようとした。
「沙貴さんが僕の手を引っ張って、触らせるからいけないんだ」
「だから、どこよ。言いなさいよ」
「で、でも」
「オマ〇コでしょ」
「うあっ……」
今度は志摩子に代わって、ナースの沙貴が診察台に上がってきた。しかも、貢を淫らな眼差しで見下ろしたと思ったら、くるりと反対を向き、お尻を貢の顔の方に向けてシックスナインの体位を取った。
「見えるぅ？　うふふふ」
後ろを振り返って貢に淫靡な流し目の視線を送る。そんな眼差しに貢は狼狽し、誘惑されてしまう。沙貴のメッシュショーツに透けた恥裂が眼と鼻の先にある。色の濃

厚な左右の大陰唇とその間に覗くよれて合わさった小陰唇が透けて見えた。メッシュの間から小陰唇がほんの一部だがはみ出していた。

「女の人の口でおちんぽをくわえられたことなんて、ないでしょ？　今から、フェラチオしてあげるわ。うふふ、あなたのペニスを口で感じさせるのよ」

沙貴は初診のとき、貢を風俗店に行く子だと決めつけていたくせに、今は逆にフェラ未体験と言って挑発する。

「えーっ、く、口でぇ？　口でなんて、しないでぇ……」

貢は生棒を手で握られた。フェラチオは知っていたが、今、ナースがそれを自分にするということが実感として湧かなかった。

だが、黒いメタルフレームの眼鏡をかけた顔がペニスに接近してきた。

「あっ、ちょっと……うあっ」

あんぐり開いた沙貴の口が、勢いよくパクッと貢のペニスをくわえ込んだ。

「はふ、あぁ、いやっ、はうぅ！」

貢は亀頭部から肉棒本体までを一瞬にして沙貴の口に含まれた。その衝撃で声が上ずった。

沙貴は頬を凹ませて強く吸いながら、亀頭を舌でネロネロと舐めてきた。口で吸引

しつつ舌で亀頭を圧迫して舐めまくる。
「しないでぇ、はう、はぐぅぅぅ！」
貢はえも言われぬ快感で顎が上がってしまった。敏感な性感帯にピラピラした舌の感触を受けて、身体が「あひぃ」という快感に負けていくような啼き声とともに伸びきった。
今、女医の志摩子は検診室にいる。鬼の居ぬ間にということなのか、沙貴は医大病院のナースでありながら大胆にも貢にフェラをしてきた。淋菌感染なのに平気でフェラする矛盾を考える余裕もなく、貢は初体験の快感のあまりされるがままになった。
「ひゃあああーン！」
ゾクゾクッと全身に快感が走った。貢は品のよい小さな口から恥ずかしい声を奏で、狂おしく身体をよじらせた。
「うふぅん」
沙貴がペニスをジュッと吸いながら、艶かしい鼻声を響かせる。
尿道からカウパー腺液が口内に溢れ出した。
沙貴は右手でペニスを握り、左手の爪で陰嚢をカリカリ掻いて刺激しつつ、亀頭の周囲を舌で舐め回す。唇に力を入れて顔を盛んに上下動させ、生棒をズッポ、ズッポ

と口で扱く。
額に汗を滲ませてギューッと強く吸い、吸う力が入ったまま顔を上げると、チュバッと、大きな音を立てて生棒が口から外れた。
「はうわぁあああああっ！」
貢はもうだめと言いたげな切ない顔になって快感と戦った。
沙貴はそんな貢をニヤリと笑って、またペニスを口にくわえた。首をひねりながら吸引してぐちゅぐちゅ扱く。その間、夢中さを表すように眼を丸く大きく見開いて寄せていた。
貢はペニスの奥まで響く快美感で、腰が痛いほどのけ反って診察台との間に隙間ができている。後頭部を診察台に擦りつけた。
ペニスの、特に亀頭海綿体の快感が急速に研ぎすまされてきて、危険領域に達した。射精が迫ったのだ。
と、検診室の重いドアが開いた。
志摩子が診察室に戻ってきた。
「あなたたち、何をしてるの！」
志摩子の怒鳴り声で、沙貴の口が亀頭まで引いたところでピタリと止まった。射精

寸前だった貢も顔が青ざめてくる。
志摩子はマイクロミニから露出している沙貴のお尻を平手で軽くだが、ぴしゃりと叩いた。
「すみません。貢クンが可愛かったので」
沙貴はすごすごと診察台から下りた。
「可愛かったのは、オチ〇チンがでしょ」
志摩子が言うと、沙貴の顔がだらしなくにやけた。
志摩子は無言でしばらく沙貴を睨んだ。
「まったく困った女(ひと)ね、看護師という立場を何だと思ってるの……。でも、やったことは仕方がないわ。貢クンも自分からオチ〇チンしゃぶられることを受け入れたんだから。あくまでもあなたとナースの個人的なことよ」
医療の建て前を通そうとしていた志摩子は沙貴を表面的には叱責した。そして貢にも念押しした。だがそんな言葉は白々しいだけ。貢も狼狽えはするものの、検査の口実で感じやすい包茎棒を弄ぶ女医とナースのたくらみは承知しているし、気持ちの上でもすでにエロ責めを受け入れ始めていた。
ただ、これから未知の検診室というところに入れられて、予告されていた前立腺マ

ッサージによる強制的な射精が行われる。それがどんなものか予測がつかないだけに、羞恥と不安の中で彷徨っている。そして痴虐の甘い期待感が芽生えてきた。

沙貴が自然に閉まっていた検診室の鉄扉の把手を回し、両手で重そうに押して開けた。

勃起した恥ずかしさからブリーフを穿いていた貢は、まごまごしていたが、「さあ」と志摩子に背中を押されて急かされ、検診室に入れられた。

志摩子も沙貴も貢を見て、顔に薄笑いを浮かべていた。医者や看護婦が患者を笑うなんてひどいと貢は思うが、反発は感じても、口答えは勿論、検査に疑問を呈する気力もなかった。ブリーフに立ちっぱなしの肉棒の形と粘液の染みが露な貢は、今や肉体的にも精神的にもS女の女医とナースのコントロール下に置かれていた。

貢はリノリウムの床にパタパタとスリッパの音を立てながら検診室に入った。十二畳ほどの広さの検診室は薬品臭が漂い、どこか冷気を感じた。広いわりには窓のない閉塞感のある部屋で、泌尿器検査をされる貢に恐怖心を抱かせた。

中に入ってすぐ貢の眼についたのは、大きな無影灯の下に置かれてある検診台だった。黒い革張りの背凭れとステンレスの座面があり、その両側に脚を乗せるペダルがニョキニョキと出ている。貢はその形を見て、恥ずかしい格好を取らされることが分

かった。
ナースが座面の下にある漏斗の形の汚物受けを前へ引いて準備した。
「この検診台もちょっと古くなってきたわね。まあ、最近のピンクや水色のより、色はこの黒の方がましだけど……」
志摩子が貢の方をくるりと向いた。白衣の前はボタンを外しているため、真っ赤なランジェリーが上下とも半分以上見えている。レースのブラに大きな乳輪と乳頭が透けていた。
「さあ、服を脱いで。よけいなパンツも脱いで、全裸で検診台に上がりなさい」
「うっ……」
貢はわざわざ全裸という言葉を使う志摩子にいやらしさを感じた。だが、女医の指示に口答えする気力はとうに失せていた。素直に上のセーターを脱ぎ、恥じらいながらブリーフも脱ぎ捨てた。
「さあ、検診台に乗りなさい」
志摩子に命じられた貢は下部のステップを踏んで検診台に上がり、ステンレスの座面にお尻を乗せた。あっと声が出そうなくらいの冷たさを感じた。
貢が検診台に上がると、沙貴が両脚の膝の裏を、くの字に折れた左右の足台のペダ

ルに乗せさせて、ベルトで固定した。脚は九十度以上開いて股間が丸見えになった。貢はたまらず両手で前を隠した。隠すということ自体羞恥そのものだ。

「うふふ、恥ずかしがらなくてもいいのよ」

志摩子は手術用の飴色のゴム手袋を手にはめた。

貢は沙貴によって両手を背凭れの下部にあるベルトで拘束されてしまった。そうなるともう、手で生棒を隠すことはできなくなった。

「手が……あ、脚がぁ……」

M字型に大きく開脚させられた貢は、身体の自由がきかないまま検査を受けなければならないことを悟った。

沙貴が羞恥で狼狽する貢の側に立って超ミニのすそを捲った。貢がちょっと横目で見下ろすだけで、ヘアーとその下部の恥裂が見えた。メッシュショーツの生地は単に網目に過ぎない。恥裂は丸ごと透けて見えている。さっきフェラされたときも網目から小陰唇まで見ているが、チェリーボーイの十七歳にとって何度見ても興奮する眺めであることに変わりはなかった。

志摩子は検診台の前の椅子に座った。背凭れが立っているため、貢は女医と向き合う格好になって、診察台に仰向けに寝かされたときよりずっと羞恥を感じる状態にな

った。正面に座った女医から、自分の股間がどのように見えているか想像するだけで、恥ずかしさで顔を赤らめた。志摩子の真紅のブラとパンティもほぼ白衣の間から見えていた。ペニスを晒す羞恥と女医のランジェリーを見る興奮で悩乱する。

志摩子が椅子に座って落ちつくまで横からバストを貢の肩に押しつけていた沙貴が、ワゴンを志摩子の右側に転がしてきた。ワゴンの上の金属のトレイには様々な医療器具が置かれてあった。

「今から精液を採取します。前立腺に菌が入っていないか、白血球の数を調べるのよ。肛門に指をズプッと入れて、ペニスに動きを響かせて射精させる前立腺マッサージを行います」

「またそんなふうに……もう恥ずかしい説明はやめて下さい」

貢は休む間もなく、恐れていた精液採取の開始を告げられた。痴女医のあからさまな言葉でチェリーボーイの恥じらう心理を突かれ、思わず気弱になる。

「ダメ、言うわよ。検査内容はちゃんとインフォームドコンセントが必要だから、じっくり教えるわ。うふふ。前立腺は男の子の生殖器よ。生殖器はペニスと睾丸だけだと思ってない？　栗の実のような形の前立腺が、膀胱の出口で尿道を取り巻いてるわ。とっても感じるちょっと硬いお肉よ。想像できる？」

「視覚での性的興奮の実験ですね。こんな状況で見せるなんて初めてで、ちょっと恥ずかしいけど、何か興味も出てきます」

万里がくるっと後ろを向いて、貢の方を顔だけで振り返って白衣のすそを両手で捲り上げた。貢の前に現れたのはレモンイエローのTバックが食い込んだお尻だった。

万里は胸が貧乳ぎみで肌も色黒だが、ウェストが締まってプロポーションがよい。お尻は頑丈な骨盤のせいか横に張ってボリュームが感じられ、形も丸みを帯びている。

「佐々木さんは上背があるから、美脚美尻の身体は見映えがするわ。男を虜にするエロなボディラインね」

志摩子が尻溝から恥裂まで伸びる細長いTバックラインを指でなぞり上げた。

「はあン、先生、貢クンの前で感じさせないで下さい」

一見気の強そうな万里も、か弱く見える快感の声を上げた。股ぐらではその一帯がパンティのすそゴムの内側で肉厚くプックリと膨らんでいる。

「わたしも恥ずかしいけど、必要な検査のためなら、見せちゃいます」

根本優子もわざとらしく検査の口実を口にして、すそ丈が腰までの白衣を自分の手でさっと捲り上げた。穿いていたスカートはちょっとした拍子にふわりと翻りそうな淡い色合いのベージュのフレアミニだった。そのフレアミニも捲った。

「いやぁ、そんな、見せなくても……」
貢はそう言いたくて言ったわけではない。見たいという願望を悟られたくなかったのが本音である。
優子の肉厚な尻は壮観で、貢は絶対自分だけではコントロールできない女のパワーを感じた。太腿も無駄な皮下脂肪がなく、色っぽくムッチリと実ったお肉である。ストッキングで表面がととのえられた綺麗な脚とお尻だった。
「根本さん、いやらしい肉付きね……。貢クン、白衣を着た女子学生のパンティとエッチな身体見せつけられたらどうなるかしら……」
優子と万里が挑発的なスカート捲りをしてみせると、志摩子が貢の眼を見て煽ってきた。
「別に私たち、悩殺するつもりじゃなくて、ただ検査としてほら、ムチムチしたお尻を……」
優子もお尻を見せながら、志摩子と同じように貢を視線で嬲ろうとする。パンストのお尻の部分は色が濃くなっていた。中心にシームの濃いすじが入って尻たぶを分割しているのが妙に卑猥に見えた。下着は白い普通のパンティだが、貢にはパンストに透けた白パンティの尻はやはり女の猥褻な丸みだった。

「ああ、いやぁ、あ、あう……」
下着やセクシーなボディを見せつけられて、言葉と視線で煽られると、気弱になってはいくが、貢は見られる興奮で溜め息を漏らした。
志摩子はそんな貢の亀頭を指でつぶして、放し、またつぶす。それをくり返した。
「えっ、そんな……ああっ！」
「ペニスの根元の括約筋が収縮して、海綿体に充満した血液がそのまま戻らなくなると、ほら、この通り。貢クンのペニスが硬ぁーく勃起しちゃうというわけ」
志摩子が言うように、貢は否応なくさらに硬く勃起させられた。
「十七歳の男の子のペニスが勃起したところ、正直言って刺激的です」
佐々木万里は身動きもせず瑞々しい直立棒を凝視している。
過敏な亀頭のみ、志摩子の指で素早く摩擦され始めた。
「そ、そんなこと……ああーっ！」
貢はお姉さんのような女子学生の前でペニスを手コキされて、もう何をどう言って抵抗すればいいかさえ分からなくなった。
貢は権威主義的な美人女医に包皮が剥けたペニスを触診され、すでに調教のための

検査であることを把握している女子医学生に見られながら、完全に勃起してしまった。学生の実習に教材として使われる立場で勃起の仕組みを猥褻に説明されると、羞恥部分を支配されるM的な心理に陥っていく。

「昂ってくると、陰嚢内の睾丸がせり上がってくるのよ。もっと快感を与えてみましょう」

志摩子の言葉で、診察台に寝かされている貢はペニスへの卑猥な責めがさらにエスカレートしそうで恐くなった。

沙貴が医療用のゴム手袋を渡した。志摩子が両手に手袋を嵌めていく。貢は飴色のゴム手袋が密着した志摩子の美しい手に、冷酷そうな、そして卑猥なイメージを増幅させる。

志摩子は手袋をつけた指に潤滑剤のジェルを塗ってヌルヌルさせると、貢の直立したペニスを握った。

「つ、冷たい。ゴ、ゴムの手袋つけてされたら……ああー」

「文句言わないの。言ってるでしょ、検査だって」

亀頭のあたりからペニスの胴の部分を強く握られている。ゴム手袋を嵌めて扱かれたら刺激がより強く、深くなりそうで、貢は思わず顔を起こして扱かれる自分のペニ

スを見た。
志摩子は狼狽える貢の顔をちらっと見て、生棒を握った手を上下動させ始めた。
ぐちゅ、ぐちゃっ。にちゅ……。
ジェルの音がする。
「うっ、くぅ、くはあああああーっ」
ナースと女子学生の眼に晒されている貢は、思い余って診察台から身体を起こし、志摩子に首を振って嫌だと意思表示した。
貢は沙貴に胸を押されて寝かされた。
「精液の検査は必要よ。それに学生に勃起から射精までの仕組みの教育をしなきゃいけないわ。恥ずかしくても手で摩擦して、いっぱい射精させますよ」
志摩子は中指から小指まで三本の指で、ペニスの胴をしっかり握っておき、片足を膝を立てて開いた。
股間を隠していた白衣のすそをパッと広げ、シースルーボディスーツの股間が貢から見えるようにして亀頭部を中心にペニスを無造作に掴んだ。
「うふふ、こうやって風俗店でやるように手で扱くわよ。でも、ここは泌尿器科の診察室。あくまでも精液検査のため」

「くうっ、で、でも、先生はスケスケの下着で、ま、股のところ僕に見せて擦ってる！」
「あはは、それはあなたが覗いてるだけ。ペニスを吐精に導く手による摩擦は、こうやって診察台に上がってやるのが一番やりやすいだけよ」
志摩子は白い歯を覗かせて笑った。さらに脚を開いてお尻の位置を貢の顔の方に近づける。しばらく口元に笑みをつくっただけの無表情で貢のペニスを見下ろした。
貢はもう抵抗しない。志摩子はそれを静かに見定めて、亀頭から少し下までを握った手を上下にせわしなく動かした。
「あっ、う、ぐっ、はあう……」
貢は小さいが苦しいような快感の声を小刻みに上げ続けた。
一方学生たちもじっとはしていなかった。佐々木万里の少し陰険そうな顔が横から迫ると、S女のいやらしい圧迫感を受けた。
ハッ、ハッと吐息を耳にかけられた。肩をすくめる貢である。横目で見るとニタリといかにもいやらしそうに笑っているではないか。何をする気だろうと警戒していると、うなじにゾクッとする冷たい刺激を受けた。万里は何と舌を伸ばして舐めてきたのだった。

「そ、そんなところ舐めないでぇ……あっ、ひぃぃ……」
女の舌のぬめりに快感にも似た怖気がふるう。たまらず上体をよじらせた。
「じっとしてなさいよ」
低い小さな声で囁く。万里の眼差しには、ためらいとか自分がやっていることへの羞恥心が見えない。まだ若いのにエッチな行為をやり慣れたナースの沙貴のような感じ。皆でやっている集団心理からか、それとも女は男が弱気で抵抗できないと分かるとすぐ調子に乗る生き物なのか、何の緊張感も抵抗もなく十七歳の少年のうなじをペロペロと舐めてきた。
貢の乳首は今、両方とも根本優子がいじっている。だからなのか、万里は腋の下に指を差し入れてきた。
「あっ、そこは！　腋の下も感じるぅ……」
指三本で掻くようにして刺激してくる。貢は腋の下でも、くすぐったさを通り越した快感に見舞われた。
貢は万里の腋の下をいじるやり方に男をからかう悪意のようなものを感じた。うなじを舐めるのとその腋の下への悪戯は、むしろ虫酸が走るような強い快感をともなう愛撫だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!